

平成 21 年 3 月 31 日現在

研究種目：基盤研究（B）  
 研究期間：2006～2008年度  
 課題番号：18401042  
 研究課題名（和文） 異教共存・融合のローカル・メカニズムに関する人類学的研究：エチオピアの事例  
 研究課題名（英文） Anthropological Study on Local Mechanisms of Coexistence of Religions: Case of Ethiopia  
 研究代表者  
 石原美奈子（ISHIHARA MINAKO）  
 南山大学・人文学部・准教授  
 研究者番号：20329741

## 研究成果の概要：

一般的には対立的に捉えられ、学術的にも別個に研究されてきたキリスト教とイスラームであるが、本研究は、これら二大宗教が古来根付いていたエチオピアにおいては、共存・融合の実態がみられることに着目し、＜異教共存＞という新たな研究領域を切り拓くことを目指したものである。毎年度エチオピア東部を中心に平均2回の現地調査を実施した結果、北東部ウオロ出身の改宗ムスリム女性の聖者モーミナを崇敬の対象とする「ファラカサ・カルト」が全国にネットワーク状の拡がりをもってみられ、この地域カルトに異教共存・融合の特徴がみられることがわかった。そして、異教共存・融合という特徴が、19世紀末から20世紀初めにかけてエチオピア帝国が領土を拡張し正教会を正統原理として国家統一を図る動乱の時代を生き抜いたムスリム聖者モーミナの人生史に由来することも明らかにした。

## 交付額

（金額単位：円）

	直接経費	間接経費	合計
2006年度	1,700,000	510,000	2,210,000
2007年度	1,500,000	450,000	1,950,000
2008年度	1,300,000	390,000	1,690,000
総計	4,500,000	1,350,000	5,850,000

## 研究分野：文化人類学

科研費の分科・細目：文化人類学・文化人類学・民俗学

キーワード：エチオピア、イスラーム、キリスト教、異教共存、聖者崇拜、精霊憑依

## 1. 研究開始当初の背景

エチオピアは様々な歴史的局面において異民族・異教が共存をはかってきた特異な国である。にもかかわらず現政権下で政治社会面では民族主義が、宗教面では復興主義が横行している。従来歴史学・人類学の分野においても、同一民族/地域・宗教からなる社会を研究対象とするか、もしくは異なる民族間の関係を対立/紛争に焦点をあてて研究するものが大勢を占め、エチオピアの人々の

日常生活の実態に顕著に見られる異なる民族・宗教に属する個人や集団同士の共存・融合の諸相については、研究対象として等閑視される傾向があった。

## 2. 研究の目的

本研究は、エチオピアの二大宗教であるイスラームとキリスト教の信徒の間にみられる共生の諸相、および二つの宗教の共存・融合がみられる儀礼の側面を日常生活の観察

を通してすくいあげ、それらがどのような論理やメカニズムによって可能になっているのか、人々の価値観や語りをとおして説明と解釈を行うことを目的とした。

### 3. 研究の方法

現地へ赴き、生活者の観点に寄り添いながら、その語りや行動様式をさまざまな記録媒体（音声・映像・文字）を用いて記録する文化人類学的手法をとった。また現地の人々がアラビア語やアムハラ語を用いて書き残した歴史文書も可能な限り複写するなど第一次資料の収集も行った。エチオピアにおける現地調査は、2006年度は2度に亘り、2007年度は3度に亘り、2008年度は1度（それぞれ1ヶ月程度）計6度に亘って行った。

### 4. 研究成果

本研究は、今日のエチオピアにおいてキリスト教徒とムスリムの間にはどのような共存の関係がみられるのか、について聖者崇拜・精霊憑依・結婚をキーワードに調査を進めた。

エチオピアでは、16世紀にキリスト教徒とムスリムの間で大規模な戦争が繰り広げられた後（アフマド・グランの聖戦）、異教徒間で大規模な武力衝突が起きたことはなく、基本的にキリスト教徒の政治・社会的優位のもとに政治統合が図られ、ムスリムは、キリスト教徒の帝国体制下では、商業や工芸職などの職業に特化した。19世紀末のエチオピア帝国拡大形成期において、南部や東部に自立的な政体を形成していたムスリム小王国や牧畜民も征服され、エチオピア帝国は多民族・多宗教の国家になった。

実態としては多民族・多宗教構成となりながら、あくまで正教系キリスト教を帝政体制の正統原理としてきたことの矛盾は、被支配民族社会を横断して形成された地域カルトの形成につながった。地域カルトは、民族や宗教の境界を越えてネットワーク状に広がる特徴をもつ。そうした地域カルトに、エチオピア西部のマチャ系オロモ社会を中心に広がった「ティツジャーニー・カルト」があり、エチオピア東部のアルシ系オロモ社会を中心に広がった「ファラカサ・カルト」がある。いずれも20世紀前半に成立し、特定のムスリム聖者を崇敬の対象とし、精霊憑依と巡礼を儀礼装置として取り込んでいることを共通点とし、このことによりキリスト教徒にも土着信仰を保持する人々にも開かれて

いる特徴をもつ。これは本研究によって明らかになった点である。

エチオピア帝国が1974年に崩壊し、宗教とは無縁の軍部主導のデルグ政権が成立すると、国民とくに若年層の間にはゆるゆる宗教離れの志向が広まる。だが1991年5月に同政権が崩壊すると、宗教活動に対する規制が解かれ、新旧さまざまな布教・宗教活動が活性化した。キリスト教徒の間では、国内各地に点在するエチオピア正教会系の聖地に再び巡礼者が押しかけるようになり、デルグ政権下では禁止されていたプロテスタント系の宗派はこぞって各地で「癒しの集会」を開催し、入信した著名な歌手は恋愛歌ではなく賛美歌を世に出し始めた。ムスリムの間でも聖者廟への参詣が復活し、それを批判する復興主義者たち（ワハビーヤ）との対立が激化し、ときにはモスク内での暴力事件にまでエスカレートすることがあった。

そうした全般的な宗教復興の動きは個々の宗教内の動きではあったが、近年、異教徒間の衝突事件も起きるようになってきている。これまでキリスト教徒とムスリムは平和的に共存してきた歴史を刻んできただけに、2005年にジンマ地方（エチオピア南西部）において、2009年ディレダワ（エチオピア東部）で起きた異教徒間の衝突は、国民に強い衝撃をもって受けとめられた。

そのような動きがある一方、ムスリム聖者廟やキリスト教の聖地においては、異教徒の参詣・巡礼を許容する寛容性がみられる。それだけでなくエチオピア国内各地で祈祷や薬草などを用いて治療行為を行っている霊媒師の場合、イスラーム・キリスト教両方の儀礼的装置を利用することがある。ここにおいて宗教の違いが作り出す「壁」は、異教を拒む排外性や個人を帰属宗教に閉じ込める閉鎖性をともなうものとしてではなく、自在に行き来でき翻訳可能な境界性をもつものに過ぎなくなる。

こうした側面が最もよく現れているのが「ファラカサ・カルト」である。エチオピア南西部アルシ地方にあるファラカサは、ムスリム女性聖者モーミナの墓廟があり、ある種特定の問題を抱えたキリスト教徒・ムスリム双方が参詣に訪れる、エチオピアで最も有名な参詣地の一つとなっている。これまで聖地ファラカサは、呪力に満ちた土地として、そこに埋葬された聖者モーミナの人生史に関

しては不明瞭な部分が多い神秘のベールに隠され、研究対象として取り上げるには難しいとされてきた。

研究代表者は、聖者モーミナの人生史を信者と子孫から詳細に聞き取りを行う機会を得、聖者モーミナが出身地としたエチオピア北東部ウォロ地方やその足跡を残したエチオピア東部のハラルゲ地方、および南東部アルシ地方の複数の土地にも足を運んだ。そしてそれらの土地で、ファラカサでの儀礼装置を模した独特な儀礼が現在も継続されていることを見出し、聖者モーミナの人生と密接なつながりをもつ地域的な拡がりをもつカルトの輪郭を明らかにした。モーミナは、ウォロ出身のキリスト教徒アムハラでありながら、夜間はムスリムのように祈禱をあげながら治療を行っていたことで皇族・貴族に知られる著名な呪術師・治療師であったが、ハラルゲ地方のグッパ・コリッチャと呼ばれる地でイスラームに改宗した。そのため今日でもムスリムの信奉者からはムスリム名で、キリスト教徒の信奉者からはキリスト教徒の名前で呼ばれる。モーミナが一時的に居住した土地には、「ハレイブ・モスク」が建設された。これは「モスク」とはいえ、中で礼拝を行う通常タイプのモスクではなく、コーヒを精霊たちに振舞う聖域となっている。不可視の精霊界においては、宗教の別は問題ではなく、一個の精霊はキリスト教徒にもムスリムにもなりうるとされ、それらが憑依する霊媒の宗教帰属とも無関係とされる。この不可視の次元と正面きって取り組む点が聖者モーミナ崇敬を中核とする「ファラカサ・カルト」の特徴であり、それこそが同カルトの異教共存を可能ならしめているキーポイントとなる。

このカルトは、聖者モーミナが足跡を残した「ハレイブ・モスク」を残した聖地をネットワークの結節点とする地域的拡がりを動脈として、個々の霊媒師を介したネットワークを毛細血管とする地域的拡がりをもっている。それは、民族や宗教の境界線を超越して広がる伝播力をもっており、このネットワークがどのような地域差をもってどこまでの拡がりをもっているのか、なぜそのように伝播するのか、については現段階では不明瞭な部分が多く、今後の課題とした。

これまでキリスト教とイスラームは、同じく一神教でありながら、国際政治の動向と結

びつき、対立する両極のごとくに扱われてきた。だが今日のエチオピアにおける異教共存の現状をみると、これら世界二大宗教は政治的権益と結びつく局面においては対立軸として掲げられたものの、本質的には相互に翻訳可能な類似点を数多くもち、対立を昇華し得る潜在性をもっており、それが不可視の次元での「共存」を可能ならしめていると結論づけるにいたった。

## 5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

[雑誌論文](計 1 件)

Matsunami, Yasuo & Minako Ishihara

‘Filming Pilgrimage to Ya’ a:  
Toward a Participatory  
Filmmaking’ Nilo-Ethiopian Studies No.13,  
pp.33-46, 2009, 査読あり.

[学会発表](計 6 件)

石原美奈子

2006年4月「不可視界を介した異教共存・融合 二つの精霊憑依の事例」日本ナイル・エチオピア学会第15回学術大会シンポジウムにて研究発表(於南山大学)

Ishihara, Minako

2007年7月4日‘Spirit Possession and Pilgrimage: The Formation and Configuration of the Tijjani Cult’, 16<sup>th</sup> International Conference of Ethiopian Studies (at the Norwegian University of Science and Technology, Trondheim)

Matsunami, Yasuo & Minako Ishihara

2007年7月4日‘On the Filming of “Pilgrimage to Ya’ a”’, Article presented at the 16<sup>th</sup> International Conference of Ethiopian Studies (at the Norwegian University of Science and Technology, Trondheim)

石原美奈子

2008年4月20日「聖地ファラカサにおける異教共存の論理」日本ナイル・エチオピア学会第17回学術大会個人研究発表(於弘前大学)

石原美奈子

2008年5月25日「エチオピアの聖地ファラ  
カサ参詣にみられる異教共存の論理」日本ア  
フリカ学会第45回学術大会個人研究発表(於  
龍谷大学)

Ishihara, Minako

2008年9月18日 ‘Attempts to accommodate  
diverse images of Muslim  
awliya? Manuscripts, oral tradition and  
manzuma (religious verses)?’, Article  
presented at the International workshop  
titled “Preserving Local Knowledge in the  
Horn of Africa: Challenges and Prospects  
for Collaborative Research in Oral  
Literature, Music and Ritual Practices”  
(京都大学アジア・アフリカ地域研究センタ  
ー主催)で研究発表(於Harari Cultural  
Center[Harar, Ethiopia])。

〔図書〕(計 1 件)

石原美奈子

2009年 「近代エチオピア国家形成と異教  
「共存」 皇帝・霊媒師・踊る精霊たち」  
単著、宮沢千尋編『社会変動と宗教の再選  
択 ポスト・コロニアル期の人類学研究』  
〔南山大学人類学研究所叢書8〕、  
pp.137-176(304頁)。

〔その他〕

6. 研究組織

(1)研究代表者

石原美奈子 (ISHIHARA MINAKO)

南山大学・人文学部・准教授

研究者番号：20329741